

「令和6年産水稻の高温対策のポイント」

令和6年6月6日
農業技術研究センター

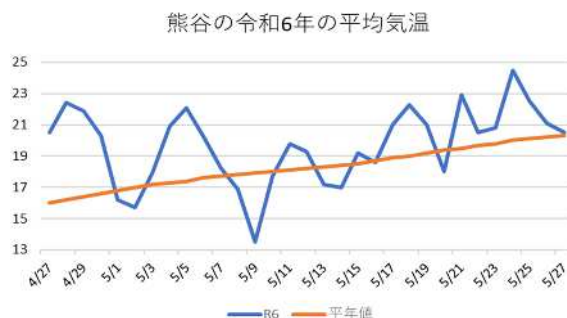
**高温障害のリスク軽減には、葉色診断に基づく追肥が最も重要です。
ほ場を良く見て回り、平年に比べ葉色が淡く感じたら追肥を検討しましょう。**

1 長期気象予報

気象庁が5月21日に発表した3か月予報では6月～8月の平均気温は60%の確率で高いと見込まれています。

また、本年4月27日～5月27日の熊谷の日平均気温は平年に比べ高く推移しています。

これらのことから、今年の夏期も平均気温は高いと見込まれ、高温対策に重点を置いた管理が重要となります。



2 対策のポイント

(1) 葉色診断に基づく追肥

早植栽培の「彩のかがやき」では通常は中間追肥を行いませんが、高温年には必要となります。ほ場をよく観察して田植後40～45日頃の葉色が葉色板で「4.5」（群落）を下回った場合は直ちに窒素成分で2kg/10a程度を追肥して葉色の維持に努めましょう。

農業技術研究センターの5月1日植「コシヒカリ」の田植後30日の葉色は「3.5」（群落）で現時点では平年よりも淡く推移しています。高温年では「コシヒカリ」や「彩のきずな」においても葉色が低下している場合は、倒伏や過剰分げつにならない程度の追肥を行きましょう。

この時期に葉色が低下しすぎると、その後に穂肥を施用しても草勢は回復しにくくなるため、このタイミングを逃さないようにしてください。

(2) 中干し

適切な水管理による根の活力維持は、高温障害軽減に非常に重要です。

有効分げつを確保したら無効分げつの抑制や健全な根系の発達により登熟を促進させるため中干しを確実に行いましょう。

中干しの期間は田面に小ひびが入る程度で、およそ7～10日間程度が目安です。

大きなひびが入るような強い中干しは、健全な根の発達を阻害し、登熟に良い影響を与えないのでくれぐれも注意してください。

3 イネカメムシに注意

イネの穂を加害するカメムシ類のうち、近年、主に県東部や北東部で「イネカメムシ」の発生が多くなっており、発生地域も拡大傾向にあります。加害により不稔や斑点米が生じ多発した場合には収量・品質に大きく影響します。一般的に越冬場所から7月上旬頃に飛来するので、6月下旬以降、暑い日が数日続いたあとは注意深く水田を観察してください。



写真1 イネカメムシ成虫